

## 改良の裏で泣く人々

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

40年以上前に見ていた景色である。小生が大学生活を過ごした神奈川県相模原市、その隣の座間市や厚木市は日産自動車の工場城下町であった。そして、街も住民も若く、活気に満ち溢れていた。

その後レバノンに逃亡したカルロス・ゴーン容疑者の身勝手極まりない振る舞いに触れ、1999年のリバイバルプランの下、仕事場である工場が閉鎖された。そこで失職した人たちの気持ちを察すると、何とも切ない気持ちになる。

最近の話題である。環境問題の対象であつて、その評価が一変した素材にプラスチックがある。特に海洋プラスチックごみは、土に戻らず、海洋汚染や生態系の変化を引き起こしてしまうことにより、それらの削減が世界的な課題となっている。

まずは当たり前前に使用されていたストローの存在が罪悪視され、米国のスターバックスコーヒーやマクドナルド、ドイツニーランドが端を発したプラスチックストロー廃止。その動きは日本にも即座に波及し、すかいらくや大戸屋、デニーズ、リンガーハットなど外食チェーンも続いた。

全日空グループはストローに限らず、機材や空港ラウンジの使い捨てプラスチック製品の総重量を2020年度末までに7割削減すると公表している。

さらには容器包装リサイクル法の関

係省令が改正され、7月1日からはスーパーマーケットやコンビニエンスストアなど全ての小売店でレジ袋の有料化が義務付けられる。それらの改革に先立ち、官庁のコンビニに入り、エコバッグで買い物をし、満面の笑みを浮かべる人気者。小泉進次郎環境大臣のパフォーマンスに、カルロス・ゴーンが被ってしまう自分はひねくれ者であろうか。

確かに誰も否定できない地球環境改善には喜ばしいことであるが、そのような急速な脱プラスチック化が、一部の企業やそこに従事する人々にとって死活問題となつていくことにはあまり光が当てられていない。

日本国内には大小様々なプラスチック製造企業が1万2000社存在し、従業員は約40万人以上いる。そのなか、ストローやレジ袋の生産を任されていたのは、ほとんどが地方の零細企業であり、これらのファミリービジネスは、イメージの悪化よりも金融機関から融資が受けられず、すでに廃業や倒産の兆候が見られていると聞く。

こちらも同じく切ない話である。

実際にプラスチック製品の国内生産量は2019年3月以降、直近まで4カ月連続で前年比割れしている。その3月は、くしくもスウェーデンの環境活動家、弱冠16歳のグレタ・トゥーンベリさんの活動がSNSを通じて世界的な支持を集め

るようになった時期である。温暖化対策も大切だが、環境保護に向け、業界も変化しようと試行錯誤している。業態変換のための猶予期間も必要ではないだろうか。

一方、日本では微生物が作るポリマーをプラスチックに置き換える技術が改良されていく。そこで公害問題取捨の経験も実績もある日本が、世界に広がるプラスチック問題でリーダーシップを取る期待も秘めている。

## Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

